

戦車供与で新たな局面へ ロシアのウクライナ侵攻から1年

ジャーナリスト

泉 洋海

ロシアによるウクライナ侵攻が膠着状態に陥る中、米国とドイツなど欧米がウクライナへの軍事支援を強化する。ロシアからの領土奪還を目指し、ウクライナ側は兵器を求めている。欧米は戦車を供与すること

足並みをそろえ、新たな局面を迎えた。今後は戦闘機や射程の長い武器の供与と出口戦略が焦点となる。ただ、戦車などの軍事支援を進めることでロシアを刺激し、さらに戦闘がエスカレートする恐れもはらむ。まもなく、ロシアによるウクライナ侵攻から1年を迎えるが、戦いの出口は見えていない。

「ウクライナが自らの領土を防衛するための支援で、ロシアを攻撃する脅威となるものではない」――。

米国のバイデン大統領は1月下旬、ウクライナに米国の主力戦車「エイブラムス」を提供することを表明した。当初はロシアを過度に刺激し、

戦争をエスカレートさせることを懸念して、戦車供与による支援に慎重だったが、ウクライナ支援に対する欧米の温度差も限界に達し、方針転換した。

団結を強調

当初、米国は戦車供与には慎重だった。同じく戦車供与に関して結論を先送りしていたドイツのショルツ首相とは何度も電話で会談。直前には、同氏とフランスのマクロン大統領、英国のスナク首相、イタリアのメローニ首相と電話でウクライナ支援の継続を確認した。うち独仏英とは担当者レベルで支援内容も確認したようだ。

その上で「米国と欧州は完全に団結している」と訴えた。

支援するのは、大隊を構成する31両のエイブラムス。平たんを開けた土地で効果的に戦うには、機動的で

遠くから軍事目標を狙って破壊できる戦車が必要になる。今後、ウクライナ軍に戦車の操作や保守に関する訓練を行うが、導入には数カ月かかるという。

既に英国は主力戦車「チャレン



ドイツ製の「レオパルト2」

ジャー2」を14両、ドイツやポーランドがドイツ製の「レオパルト2」の供与を表明しており、ウクライナ側は第1弾として供与される戦車は、120〜140両になるとの見通しを示した。

ウクライナのゼレンスキー大統領は、戦車供与への謝意を示した上で、「重要なのは訓練のスピードと戦車の量」と強調し、ロシアから領土を奪還するために300〜500両の戦車が必要になると訴えている。

苦渋の決断

米国より前に戦車供与を決めたドイツもまた、苦渋の決断だった。

ドイツは第2次世界大戦で旧ソ連と戦車戦を交えた背景があり、ウクライナへの戦車供与には、自国だけが突出しないよう慎重姿勢を貫いてきた。特に、北大西洋条約機構（NATO）を主導する米国の動向を注

視してきた。

ウクライナから、雪どけの春にも予想されるロシアからの猛攻撃に對抗するため戦車を求められる中、英国が供与を決め、バルト3国もドイツに供与を求めた。ドイツ製のレオパルト2を保有するポルトガルも、本来必要なドイツの許可がなくてもウクライナに供与する意向を示した。

1度は決断を保留したシヨルツ氏だったが、与党内部からも決断を迫られ、米国からも提供を要求されるなど、じわじわと包囲網が狭められた。

これまで供与に否定的だった米国が態度を変えたことや、英国などNATO加盟の各国が前向きだったことなどから、国内の慎重派も押さえ込めると判断したとみられる。

ロシアのすり替え

しかし、ロシアは特に米独によるウクライナへの戦車供与の決定に反発。タス通信によると、アナトリー・アントノフ駐米大使は「ロシアへの目に余る挑発だ」などと強く批判した。

プーチン大統領は第2次世界大戦で激戦地となったボルゴグラード（旧スターリングラード）を訪問し、スターリングラード攻防戦から80年を記念する演説を行った。その中で、ドイツがウクライナに主力戦車「レオパルト2」を渡すことに触れ、「われわれは再びドイツの戦車に脅かされることになる。ナチズムが現代の装いを纏って安全保障を脅かす」などと被害者としてのロシアの立場を強調した。

今回の戦争はロシアが一方的にウクライナに侵攻して始まった。だが、プーチン氏は先の大戦で、ナチス・ドイツに攻め込まれて始まった独ソ戦と同一視し、「再び西側を撃退しなければならなくなった」などとして国民に理解を求めた。侵略戦争を祖国防衛の戦いにすり替えて、国民を鼓舞しており、国際社会からも強く批判を浴びている。ドイツにすれば、ま



われわれは再びドイツの戦車に脅かされることになる

さにかつてのナチスによる侵攻という、最も黒い歴史が呼び覚まされる発言だっただろう。プーチン大統領は以前から、ウクライナのゼレンスキー大統領をナチスになぞらえて表現するなど、ロシアの侵攻を正当化するために一方的な主張を繰り返している。

見えない出口

米国はウクライナに対して、さらに21億7500万ドル（約2850億円）の追加支援を発表し

た。高機動ロケット砲システム「ハイマス」の攻撃範囲を2倍に延ばせる新兵器も含まれており、クリミア半島の一部を射程に収めることができるという。また、次の段階として、ウクライナは戦闘機の供与を求めている。米国もドイツも否定的だが、一部報道によれば欧米各国で供与に向けた検討が行われているという。

ウクライナは、春以降にも激化する恐れのある戦いに向け士気は上がっており、領土を取り戻す意気は盛んだ。軍事支援が進むにつれその可能性は高くなるかもしれないが、戦争終結が遠く恐れも高まる。全ての侵略が失敗に終わる世界であつてほしいが、ウクライナに領土を奪還された場合でも、侵攻を始めたロシアが敗北を認めるわけではないだろう。そうすると、欧米がウクライナを支援すればするほど、両国の犠牲者は増え、戦争終結も見通せなくなっていく。侵攻から1年を経て、この悪の連鎖をどうすれば止めることができるのか。軍事支援と並行して、戦争の出口を考える時期にきているのではないかと思う。